The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	しつけと社会階層の関連性に関する分析
Author(s)	片岡, 栄美
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1987, 13, p. 23-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10787
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

しつけと社会階層の関連性に関する分析

片　岡　栄　美

1　しつけと社会階層の関連
2　社会階層としつけの測定に関する方法的問題
3　調査の対象，方法，内容と測定の性質
4　調査結果にみるしつけの階層差
5　結果の要約と考察

しつけと社会階層の関連性に関する分析

本論文は，子どもの社会化をめぐって親子間のしつけと社会階層との関連性を実証的データにもとづいて検討することを目的としている。青年期における社会化を家庭のしつけに焦点をあて，(1)社会階層による差がどの程度存在しているか，またいかなる側面で最も階層差が顕著に現れるか，(2)しつけと社会階層の関連をいかなるメカニズムとしてとらえるか，について検討を加えることにしよう。

一般に，社会化研究を大別すると，(1)社会化主体（家庭，学校，地域社会，マスコミなど）に焦点をあて，社会化の環境条件を検討する方向での研究，また(2)社会化客体（子どもなど）の発達に焦点をあて，その変化と結果を問題とする研究，たとえば子どもの認知的発達や感情，態度，性格といった非認知的側面の発達をさまざまの角度から扱う等がある。

基本的に社会化とは，集団の価値を個人の中に形成するプロセスである。個人の側からみればそれは，成長と発達の可能性を実現していくプロセスであり，社会の観点からは，社会化は文化の伝達過程であるとともに，個人が組織化された生活様式に適応する過程でもある。社会は子どもに，何を知る必要があるか，何を学習する必要があるかを教える。ここでは「しつけ」を広い意味での家族の社会化行為ととらえて，社会階層との関連性を考察することにしよう。

家族の社会化研究，とくに「しつけ」への社会学的アプローチには，(1)しつけを階層文化的伝達あるいは階層的価値形成の問題ととらえて，社会階層による違いを分析する方向がある。すなわち，しつけ行動と社会階層構造との機能的連関を仮定し，そのプロセスを解釈，説明しようとする研究である。この立場からの研究では，しつけの方法，内容や親の子どもに対する価値期待などに社会階層差（階級差）を見い出し，それらは階層ごとに異なる生活状況，価値観や信念のパターン，あるいは所属階層を反映した社会関係によって生じると解釈する。この見方の背景には，あらゆる行為は，その基盤となる知識，価値，信念の体系があり，その多くは社会経済的基盤をもつと解釈する社会学の伝統がある（Gecas, V. 1979)。したがってしつけの階層差を説明する場合も，家族の構成要素や家族構造に説明を求めるよりは，むしろ家族の社会的地位や職業，学歴，経済状態や階層間の社会関係・相互作用パターンなどの社会・文化的状況が重視される。この場合，子どものパーソナリティは社会的・文化的要因の所産とみなされる。

これにたいして，(2)家族を主たる独立変数として扱い，家族の構造と機能を重視する立場

がある。すなわち，家族形態や家族構成の違いが，しつけの内容や方法，親子関係など家族内部の相互作用プロセスに差異を生み出すことに注目する。また家族の人間関係が法則性をもつものとして構造的にとらえ，その機能的役割構造と子どものしつけやパーソナリティとの関連を明らかにしようとする方向でもある。パーソンズとベールズ（Parsons, T. & Bales, R. F. 1955）の核家族の構造と機能の研究やボッサードとボル（Bossard, J. H. S. & Boll, E. S. 1945）の研究は，この理論的立場を代表するものである。これらの理論においては，社会的・文化的階層や社会階層と結びついた生活状況の違いは，家族数や家族内の役割構造・権威構造の違いとして現れると仮定されており，価値観や文化状況の違いはそれに付随するものとしてあまり強調されないのが特徴となっている。

本稿では，第1の方向，すなわちしつけを社会階層のなんらかの関数であると強調する文脈に立って，この考え方が我が国の家庭のしつけをとらえるうえで果たしてどの程度妥当な立場であるかを検討していくことにしよう。

1　しつけと社会階層の関連

家族の社会化研究において社会階層による差異を扱う研究は，これまで主としてアメリカを中心に展開してきた[1]。たとえば1940年代に Davis, A. と Havighurst R. J. (1946) は社会階層による行動の違い，パーソナリティの違いを，乳幼児期の母親の養育パターンの階層差に求めた。それによれば，中流の母親のしつけはきびしく，下層の母親のしつけは放任的であると報告されている。しかしその後，Sears R. R. (1957) らの実証的研究では，育児法についてはむしろ下層のほうがきびしいという逆の結論が導かれている。このような異なった結果に基づいて，初期のレビューをおこなった Bronfenbrenner, U. (1958) は，1930年代—1950年代の間に，アメリカでの子どものしつけに変化が生じてきたことを多くの実証的データにもとづいて指摘している。すなわち，乳児保育の方法は，1930年から第2次大戦終結にかけては中流階級のほうが労働者階級よりもきびしかったが，それ以後は逆転し，中流階級の母親のほうが下層よりも甘くなってきたと報告している。戦後，中流階級の母親は，子どもに対してより許容的（Permissive）なしつけ方をするように変化してきたというのである。具体的には，子どもの自発的な欲求に対してより寛大となり，愛情の表現も豊かになるとともに，体罰によるしつけが減少して，説明や良心に訴える方法が増えているという。この傾向は，労働者階級の親よりも中流階級に特徴的であるが，全体として階層間のしつけの差異は縮小してきたと述べている。そして労働者階級の親よりも中流階級の親において，しつけに対する考え方の変化が顕著であるのは，中流階級ほどしつけに関する情報，とくに専門家の意見や新しい情報に接する機会が多いからだと説明している。しかしこの

ような解釈の妥当性については，十分検討されていないといえよう。Bronfenbrenner, U. によれば，しつけにみられる階層差は主としてマスコミなどの情報手段の発達に伴う歴史的現象であると説明される。

これに対して，しつけの階層差を問題にする上でもっともポピュラーな考え方は，しつけ行動と社会階層構造との機能的連関を強調する立場であろう。しつけ行動と社会階層の結びつきのプロセスをどのように解釈するかについて，大きく2つの考え方に分類することができるものと思われる。第1は，しつけ行動はそれぞれの生活状況と結びついた親の価値観や志向性が，子どもへの価値期待という形で子どもに伝えられるとする見方である。いいかえれば，階層により異なる価値や志向性を主たる説明要因とする立場である。コーン（Kohn, M. L. 1969）はこの考え方にたって実証的研究を積み重ねている。

コーンは，価値，志向性の社会階層による差に関する研究をすすめ，社会階層が高い親ほど子どもに自立的（Self-directed）であることを望むのに対し，社会階層が低いほど外的権威にたいする同調（Conformity）を望むという傾向を指摘する（Kohn, M. L. 1969）。すなわち，(1)親が子どもにとって望ましいと考える価値や態度，いいかえれば親の価値期待（Parental Value）は社会階層によって異なっており[2]，それは自立―同調を両極とする価値軸によって説明できる。(2)中流階級の自立性志向と労働者階級の同調志向に応じたしつけ，子育てが行われている。(3)社会階層によるパーソナリティの違いが自立―同調という形で存在する，という図式を展開している。つまり中流階級の仕事には，「外的な権威ではなく，自らの判断と基準に基づいて行動する」自立性が多く望まれているのに対し，労働者階級の仕事には，権威やルールに従順であることが望まれる。いいかえれば階層的価値は階層と結びついた生活状況，職業的状況の所産であるというのである。この考え方は，価値や志向性が外的世界の要求によって形成されているとするものであり，ヘス（Hess, R. D.1970）の指摘するように，「社会的ニーズの1つの反応としての親の社会化」，「所与の役割を満たすための社会化」という印象をまぬがれえない。

コーンの理論図式を図示すると図1のようになり，実証のレベルでは親の価値期待の分散の14～25%が社会階層によって説明されると報告している。しかし子どもに対する価値期待

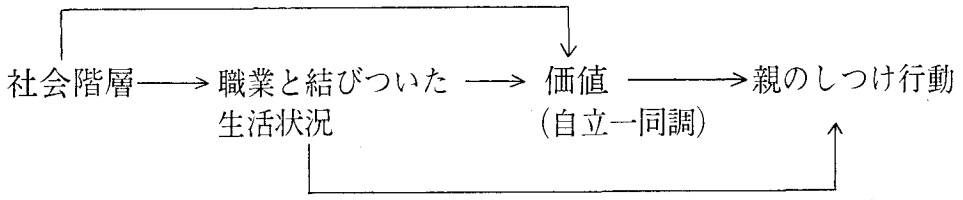


図1

と実際のしつけ行動（しつけ方，体罰の使用）とを結びつける点で，かならずしもうまく対応しなかったのである。この点に関し，コーンは体罰が行われる状況の違いこそが問題であると述べている。

コーンの研究とは視点が多少異なってはいるが，第1の研究カテゴリーの中に含まれるものとして，例えば，Berger, Cohen, Conner & Zelditch (1966) の研究や McKinley (1964) の研究をあげることができよう。これらの研究は，自己概念や他者の期待を中心とする社会心理学的な説明変数を重視する立場である。子どもの階級・階層に関する知識は主として家庭の社会化プロセスを通して比較的早い時期に獲得されることが明らかにされている。いわゆる社会階級学習，社会階層差に関する認識が子どもに内面化されることによって，それは個人の価値観や態度，達成志向に影響を与えるものと考えられる。具体的に述べれば，どの階級に所属しているかという認識や劣等性・下位であることの自己概念は，低い達成動機につながったり，成功の見込の限定，失敗の予期的社会化などの価値や信念となると考えられている。McKinley (1964) では，低い職業階層の父親は，職場でフラストレーションを起こしやすく，それが家庭での攻撃的行動となって現れると指摘する。このような親の状況は，イニシアティブに富んだ子どもの行動や独断的行動をきびしく制限する傾向として現れるとされる。

第2の立場は，言語・コミュニケーション行動の階層差から説明しようとする研究である。この立場にたつものとして，バーンスティン (Bernstein, B. 1971) があげられる。彼は，階層によって異なる価値体系や行動様式を言語コードによって明らかにしようとする。すなわち，イギリスのワーキングクラスは制限コード (restricted code)，ミドルクラスは精密コード (elaborated code) という異なった言語コードによってコミュニケーションを行うと指摘する。制限コードによる意味伝達では，意味の範囲は，精密コードよりも狭く，文法的にも単純で，暗黙の示唆や状況を共有するものだけが理解できる状況規定的な用語が中心となる。例えば命令型の文が多用される。これに対して精密コードでは，語彙が豊富で文法的にも複文や受動態など抽象的な議論に適した言語であるといえる。そして意味の限定は，文の内部構造あるいは文と文の関係を通して言語的，明示的におこなわれる。したがって，精密コードを用いるミドルクラスは，言語のゲームによって記述的であるばかりでなく分析的志向が強い。これに対して制限コードを用いるワーキングクラスは，主として具体的なことがら，意見，感情を記述的に述べることは得意であるが，分析的な議論は不得意であるという。バーンスティンの理論は，親と子のコミュニケーションパターンが，階層によって異なる可能性を示唆する点で興味深い。したがって，子どもに対するしつけや社会統制のありかたは，このような相互作用パターンの階層的差異を反映して，ミドルクラスの家庭では，間接的，説明的，言語的に行われるのにたいして，ワーキングクラスの家庭では，直接

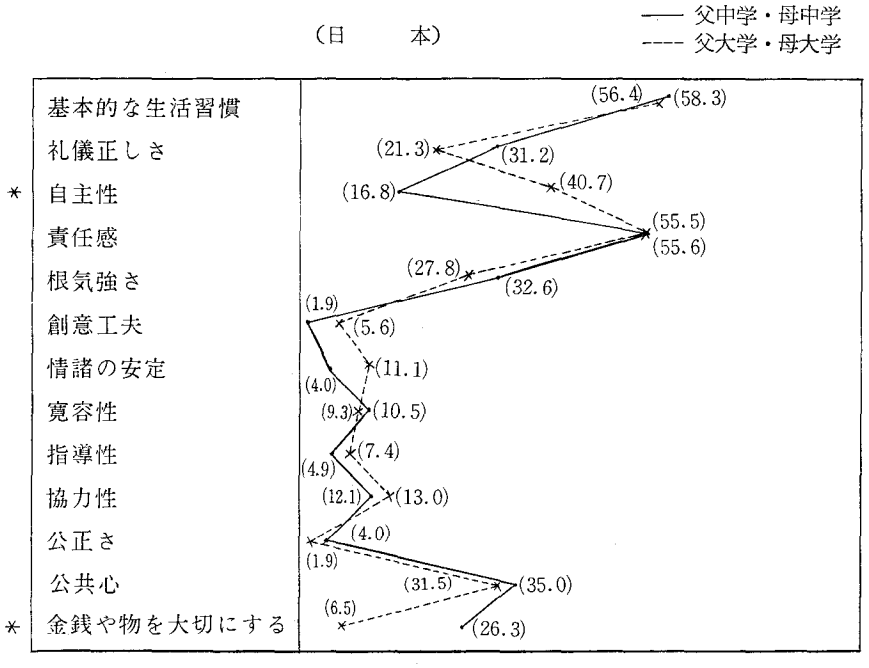
的，命令的，非言語的になる傾向があると考えられる。

我が国ではこれまで親の養育態度やしつけ行動に関して，数多くの研究が実施されてきたが，その多くは社会化を役割取得のプロセスとみる立場や相互作用のプロセスと家族の構造と機能に焦点をあてた研究，あるいは心理学的アプローチによるものが多い。したがって，社会の側から社会階級の価値体系を身につける社会化や文化伝達の行為としてしつけと階層との関連に焦点をあてた研究はそれほど多くない。

我が国におけるしつけの社会学的研究として，第1に東京学芸大学社会学研究室の行った調査研究（1963）をあげることができる。パーソンズの AGIL 分析図式にもとづき，親の側からの規範意識の注入の4タイプについて分析している。その中で，親のしつけ態度と社会階層の関連性にも言及している。まずしつけ内容を＜行動様式＞＜心情＞＜民主的道徳＞の3領域に分類し，各7項目づつ調査した結果，＜行動様式＞では，「規律正しい生活をする」「健康に注意する」の2項目で職業，学歴による統計的に有意な差が見出されている。「規律」を重視するのは，ブルーカラーよりもホワイトカラー，低学歴層よりも高学歴層であり，「健康」も高学歴層ほど重視する項目であった。同様に，＜心情＞の領域では「自分の行動に責任をもつ」ことを重視する者の割合が高いのは，ホワイトカラー，高学歴層であり，「心のやさしい人間になる」と「正しいことはどこまでもやる」ことを重視するものは，ブルーカラー，低学歴層に多いと指摘されている。＜民主的道徳＞の領域では，「親兄弟を理解し愛情をもたせる」はブルーカラー，低学歴層に多く，「立派な団体生活ができるような人になる」は逆にホワイトカラー，高学歴層に多い。全体的にみれば，3領域21項目のうち統計的に有意な階層差を示した項目は計7項目で⅓にあたる。

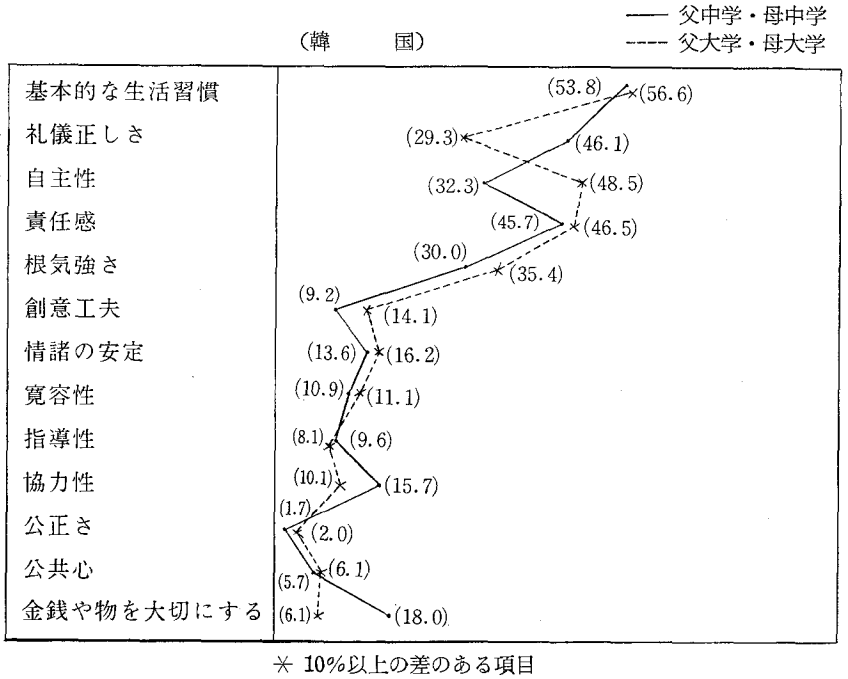
他にしつけ行動の階層差に言及した調査研究としては，姫岡勤，上子武次，増田光吉による「現代のしつけと親子関係」（1974）をあげることができる。

階層としつけの関連は，社会的・歴史的状況によって異なっていると思われる。この種の研究は最近になってようやく行われ始めた。心理学研究の立場から，「母親の態度・行動と子どもの知的発達」をめぐって日米比較研究が行われている。東洋，柏木恵子，ヘスらを中心として1973年に実施された調査は，ヘスのシカゴ研究とバーンスティンの理論を土台とし，母親の言語コミュニケーション行動の違いが子どもの知的発達にいかなる影響を及ぼすかという視点から行われている。報告書（東洋，柏木恵子，R. D. ヘス，1981）では社会階層との関連性についてはあまり詳しくは触れられていない。概略的に述べられた結果によると，子どもの教育・しつけに関する意見や発達期待，しつけ方略，母子相互作用パターン，コミュニケーション・パターンなどの全変数84のうち，有意な階層差が認められたのは，日本で21変数，アメリカで18変数であった。日本社会の階層的等質性という認識とは，かけ離れた結果であるだけに非常に興味深いといえよう。しかし階層差という点からしつけを問題にす



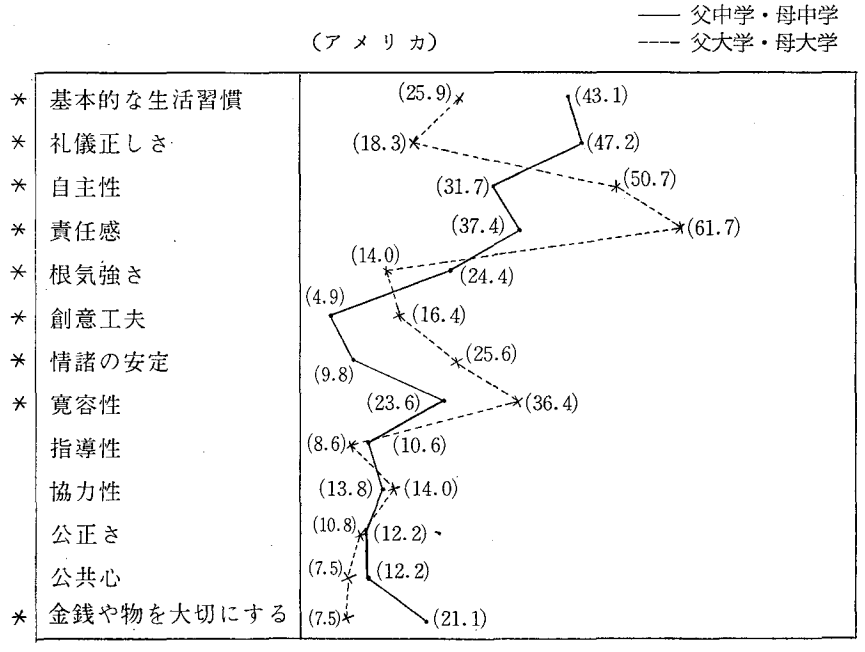
＊ 10%以上の差のある項目

図2-1　しつけの国際比較（親が子どもに望む特性）
<総理府青少年対策本部「日本の子供と母親」1981年>



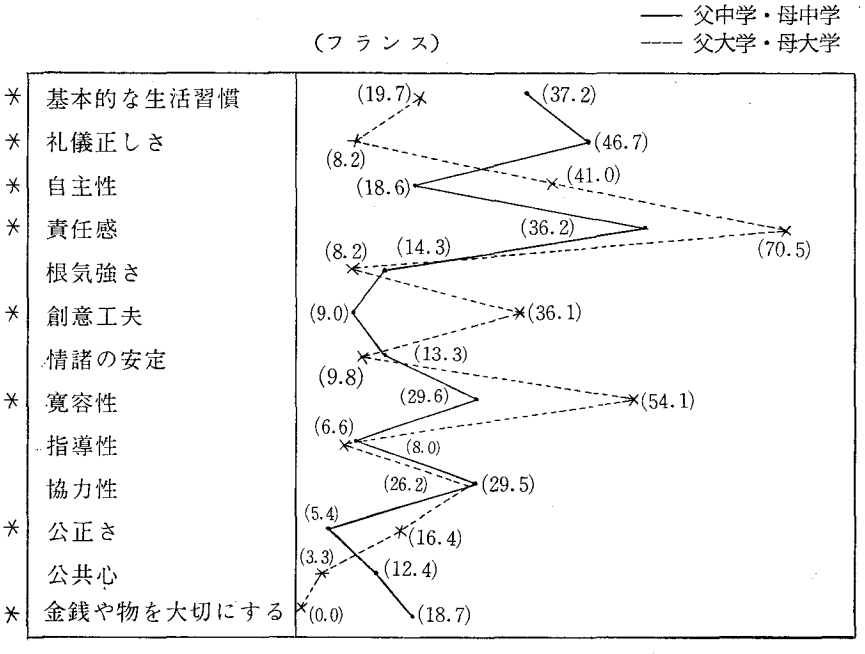
＊ 10%以上の差のある項目

図2-2　しつけの国際比較（親が子どもに望む特性）



＊ 10%以上の差のある項目

図2-3　しつけの国際比較（親が子どもに望む特性）
<総理府青少年対策本部「日本の子供と母親」1981年>



＊ 10%以上の差のある項目

図2-4　しつけの国際比較（親が子どもに望む特性）

るには，サンプル数が少ないこと（日本76ケース，アメリカ67ケース）が統計的有意差の結果の信頼性の低さにつながるものだと思われる。

また母親の子どもに対する価値態度の国際比較として，総理府青少年対策本部編の調査報告「国際比較　日本の子供と母親」(1981) は興味深い結果を提示している。まず第1に，日本の親子関係の特徴として，母親の注意（強制）が子どもにほとんどききいれられていないことを指摘している。子どもの年齢をコントロールしても他国の親子関係に比べてこの傾向が強い。第2に，他国と比較して，我が国では親の価値期待に関して学歴による差の小さいことがあげられる。図2－1から図2－4は，親の子に対する価値観（子どもに身につけてほしい大切なこと）を各国別，親の学歴別に図示した結果である（日本，韓国，アメリカ，フランスの比較を抜粋)。我が国と韓国に共通の特徴として，学歴差を示す項目が数少ないといえよう。我が国において学歴差の大きな項目は，「礼儀正しく」（中卒31.2%＞21.3%大卒)，「金銭や物を大切にする」（中卒26.3%＞6.5%大卒)，「自主性」（中卒16.8%＜40.7%大卒)，「情緒の安定」（中卒4.0%＜11.1%大卒）である。階層と関連する変数としては両親の学歴による比較だけがなされているため，必ずしも階層差が小さいとは断定できないが，その可能性は十分考えられよう。このように親の子どもに対する価値観に階層差が小さいという結果は，具体的なしつけ行動の階層差についても我が国は比較的等質であることが予想されるのである。さきほどの柏木らの結果とは，推測される方向が逆であるため，果たして日本のしつけ行動はいずれの解釈が妥当であるか判断は難しいと思われる。

そこで，しつけ行動の階層差がどの程度存在するのか，あるいは階層差は見出せないのか，もし存在するならば，階層によるしつけのパターンはどのような形で存在するかについてデータに即して詳細に検討することにしよう。

2　社会階層としつけの測定に関する方法的問題

(1)　社会階層の指標

社会階層の測定に際して，いかなる指標を構成するかは重要な問題である。本稿では，社会的ヒエラルヒー上の地位に関して「社会階層」の語に限定して使用することにする。社会階層の概念は，厳密には複合的要素で構成されるものであるが，中流階層と労働者階層のように1次元的に扱う場合もあれば多次元的な概念として扱う場合もある。したがってその測定にあたり，これまでにいくつもの階層指標が提示されている。多次元的把握によって構成される指標を大別すると，(1)職業的地位，教育，収入などいくつかの変数を重みづけして合成し，ひとつの複合指数として扱う　(2)関連変数をそれぞれ独立の変数として扱うのいずれかである。複合指数では，ホリングスヘッドの指数，ダンカンの SEI スケールなどがある。階層指標としていかなる変数ならびに指標が最も適切かを検討することは重要な問題であるが，我が国の特徴として階層を構成する諸要因の分散が1次元的でなく，むしろ各次元でかなり異なった層が分布しているという結果が報告されている（今田高俊，原純輔，1979)。いいかえれば階層の諸要因は層としてはほとんど結晶化していないといえるのである。単一の階層概念ではとらえられないことと，職業や収入，教育の関連性を見るかぎりひとつの変数によって明確な層の確定ができにくい多元階層的社会であるということも指摘できるだろう。このような特徴を考慮し，本稿では職業，学歴，経済状態を複合指数とせず個別の階層変数として扱い，各変数による差異について比較検討を行う。

(2)　しつけの測定と比較の問題

親のしつけ行動を測定するにあたり，次の各点が問題となるだろう。(1)親からの報告であるか，子供からの報告であるか，(2)子どもの年齢や性別など，(3)親の年齢やしつけ担当者の違い，(4)過去の経験（回顧的データ）であるか，比較的現在の経験であるか，(5)事実の報告か，事実に対する主観的意味付け・解釈か。これらは結果を比較検討するにあたり，十分考慮する必要がある。

また同じ概念を扱っていても質問の仕方によって，結果に差が生じることがある。とくに経験に対する主観的意味付けを答えてもらう場合には，ワーディングの違いで結果が異なる場合が生じる。

3　調査の対象，方法，内容と測定の性質

本稿で扱う調査データは，大阪府下の公立高校普通科に在学する高校2年生855名を対象とする質問紙調査の結果である。対象校は高校受験の難易度によるランクづけに従い，ランクA～Eの5枚を選択し各学校からほぼ同数のサンプルを回収した。調査時期は，1982年3月～5月であり，留置法による。サンプルの構成は表1，表2に示すとおりである。調査内容は，親のしつけの実態，親子関係，自立性に関する質問項目，親の社会的属性（父母の職業，学歴，家庭の経済状況），家族構成などである。しつけに関しては，「きびしさ」をどのように認知しているか，しつけの内容ごとに，その程度を明らかにした。小・中学校時

表1　父親の職業階層

専門的・技術的職業	11.8 (101)	技能工・生産工程従事	21.3 (182)
管理的職業	25.8 (221)	保　安　職	0.8 (7)
事　務　職	6.7 (57)	サービス職	3.6 (31)
販　売　職	9.6 (82)	無　　職	0.4 (3)
農林漁業	0.4 (3)	無答・父なし	14.4 (124)
採鉱・採石	0.1 (1)	計	100.0 (855)
運輸・通信職	5.0 (43)		

表2　父親の職業階層と学歴　　（数値%）

父職業	父学歴			母学歴		
	大学卒	高校卒	義務教育卒	大学卒	高校卒	義務教育卒
専門的・技術的職業	45.2	28.6	26.2	24.4	43.9	31.7
管理的職業	56.5	36.8	6.7	24.0	66.1	9.9
事　務　職	37.5	47.9	14.6	17.8	62.2	20.0
販売・サービス職，運輸・通信職	25.8	52.3	21.9	12.8	64.0	23.2
技能工・生産工程従事，農林漁業，単純労働	16.8	37.4	45.8	10.5	45.1	44.4
計	36.5	39.8	23.7	17.8	56.6	25.6

代をふりかえっての回顧的データと現在の時点での「きびしさ」をそれぞれ評価させている。これらは客観的情報ではないが，子どものパーソナリティに及ぼす影響に焦点をあてるには，むしろ主観的情報のほうが適切であると判断した。

4　調査結果にみるしつけの階層差

以下では，しつけの各側面ごとに，我が国においてしつけの階層差がどの程度存在するかについて検討していく。まず，階層差をめぐる議論を整理するとともに，過去の研究結果と本稿での調査結果を相互に比較検討しつつ，議論の一般化を行うことにする。

(1)　しつけ方法と階層差

しつけ方法に階層差があるという議論は，これまで主としてアメリカを中心として展開されてきた。具体的には，「子育てにおいて労働者階級は体罰を使用することが多く，中流階級は理由付けなどの心理的テクニックを使用することが多い」という議論である。Bronfenbrenner, U. (1958) は過去の研究をレビューし，このような一般化を行っている。しつけの具体的行為として，体罰を行うか，理由付けをともなうしつけをするかに社会階層による有意差が存在するという議論は，その後広く一般化した言明として受入れられていたが，Erlanger, H. S. (1974) は，初期の研究から引き出されたこの種の一般化に対して，近年の研究からは異なった結論が導かれると主張している。すなわち，社会階層と体罰使用の間の関連はそれほど強いものではなく（関連のあることはみとめられるが），分散の2％を社会階層が説明するにすぎないという結果を示している。統計的有意差の認められない調査結果もいくつか存在することから，階級や人種と罰の与え方を結びつけて特徴付ける一般化に疑問を呈している。また，体罰の使用という事実よりは，それがいかなる状況の下で行われたかを問題にするべきであるという指摘もなされているが，当然であろう。しつけの心理学的研究には，罰の受け手と与え手の関係と罰の効果についての実証研究が数多くあることも付け加えておこう。アメリカにおいてこうした議論が展開される背景には，権威主義的な親子関係や権威主義的パーソナリティさらには「暴力のサブカルチャー」[3] が，社会階層や人種問題と結びついて扱われる社会文化的状況があることと無関係ではない。

我が国でこれと同様の問題関心からしつけに論及した研究は，それほど見当たらない。体罰という行動をことさら問題にすること自体が，子育ての日本的状況にそぐわない発想であるとも考えられよう。民族学的研究が明らかにする我が国の「しつけ」の背景には，「7つ前は神のうち」という性善説的子供観がある（我妻洋，原ひろ子，1974）。また「恥の文化」

や「群の教育」といった伝統的文化としつけのありかたは，罰の与えられ方の文化的違いとともにしつけの違いとしてとらえることができよう。問題の設定の仕方に日米の違いを見出すことは，ここではあまり触れないことにする。

今回の調査結果では，しつけ方法と親の階層変数の間には全く関連性を見出すことができなかった。表3は，しつけ方法を「説明型」「ひとこと型」「小言型」「どなる型」「なぐる型」の5つに分け，性別，父親の職業，父母の学歴ごとに集計した結果である。全体としては，小言型が最も多く43.7%で，説明型25.7%，ひとこと型24.0%とつづく。体罰にあたる「なぐる型」は，1.8%であり，「どなる型」4.9%を含めたとしても，日常的に体罰やそれに近いしつけ方法をとる親は非常に少ない。性別，社会階層別，学歴別にみても，しつけ方法については全く差異を生じていない。この質問は，しつけの担当者を確定しなかったこと，さらにしつけ方法の日常的パターンを明らかにする項目であるため，階層変数との関連性を検討するにあたり問題がないわけではない。しかし表3からは，青年期のしつけ方法について社会階層による差異は存在せず，均質であることが予想されるのである。

今回の調査とは比較はできないが，柏木恵子とヘスらの日米比較研究（1981）では，母親調査から幼児のしつけ方法に関して明確な階層差が報告されている。しつけ方略を9つのカテゴリーに分類し，階層との相関をとっているが，そのうち日本では，＜地位によるしつけ＞（服従すべき理由，根拠を全く述べないで，親の地位，権威に訴えるやり方をとる傾向）と＜個人的・主観的理由によるしつけ＞（子ども自身の気持ち，他人への感情，思惑に訴えて服従を求める傾向）による方法に階層差が顕著であったとされている。興味深いことには，＜地位によるしつけ＞の方法を取るのは，階層の高い親に多く，＜個人的・主観的理

表3　しつけ方法（性別・階層別）

	全体 (n=742)	男 (n=349)	女 (n=385)	男		女		母学歴(男女)		
				ホワイトカラー	ブルーカラー	ホワイトカラー	ブルーカラー	大学卒	高校卒	義務教育卒
説明型	25.7	27.5	24.4	29.7	26.8	24.5	21.8	24.5	26.4	24.2
ひとこと型	24.0	23.2	24.4	19.4	24.8	23.3	25.6	23.6	25.8	20.9
小言型	43.7	43.3	43.9	45.5	40.9	45.3	45.5	44.5	43.1	45.8
どなる型	4.9	4.6	5.2	4.8	5.4	4.4	5.8	3.6	3.8	6.5
なぐる型	1.8	1.4	2.1	0.6	2.0	2.5	1.3	3.6	0.9	2.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

説明型　よくわかるように説明する
ひとこと型　ちょっと言ってあとは何もいわない
小言型　口うるさく小言をいう
どなる型　すぐどなる
なぐる型　よくなぐる

由によるしつけ>を取るものは階層の低いものに多い傾向が見出されたことである。また日本の結果は，アメリカとはまったく逆の相関となっているのである。対象となった母親は子どもが3才から6才であり今回の調査とは比較できないこと，しかもサンプル数は日本76ケース，アメリカ67ケースと少ないため，結果がどの程度信頼に値するものかは疑問の残るところである。これらの結果から柏木は，(1)しつけ方略には日米いずれでも階層差があるが，そのパターンは日米で逆であり，アメリカでは<地位>に訴える直接命令方略は低い階層に多く，従来の結果と一致する。これに対して，日本では，<地位によるしつけ><直接命令>は，高い階層に多い。(2)日本における母親特性の階層差は，低い階層に日本的特徴が残り，高い階層では日本の伝統パターンから離れて欧米化の方向にある，と指摘している。

(2)　年齢，性別によるしつけの違い

しつけの特徴として従来から指摘されているのは，我が国は男女によるしつけの差異が大きい社会であることである。今回の調査ではしつけ方法に関して，男女，年齢による差異は見出せなかったが，しつけ内容については，年齢，性別による差異が明確であった。図3と図4は，小学校・中学校時代（過去）と高校時代（現在）のしつけの男女差を比較した結果である。いずれも各項目に対して，「きびしい」,「よく注意された」と答えた者の割合を示している。以下では，しつけ内容を6つの側面に分けて考えていくことにする。各側面は(1)外面的行動―礼儀やことばづかい，服装・髪型などをきちんとすることに関するしつけ，(2)社会道徳―公共の場でのエチケットや社会正義に関するしつけ，(3)社会性―責任性，約束を守る，嘘をつかないといった自律とかかわるしつけ，(4)役割取得の期待―男の子らしく・女の子らしく，兄姉・弟妹らしく，など子どもの特定の地位に結びついた行為の規範，すなわち役割取得を期待するしつけ，(5)家族役割と親の権威への服従―親のいいつけをすなおにきく，家事の手伝い，親・兄弟の恥にならないように，など家族役割や親の権威に従うことに関するしつけ，(6)達成の強調―成績，進路などの学業達成に関する期待である。

図3，図4からわかることは，しつけのきびしさに性別による違いがみられることである。(6)達成の強調を除くほとんどすべての項目で，女子は男子よりも厳しくしつけられていることがわかる。とくに女子にきびしい項目は，(1)外面的行動の各項目，(4)役割取得の期待，(5)家族役割や親の権威への服従，である。小・中学校，高校時代を通じて，女子は男子に比べて，外的権威・親の権威について従順であるようにしつけられていることが明らかである。さらに男子は高校生になると，進路を除くすべての側面で「きびしい」と答える者が減少し，親の男子に対する規制や期待はゆるやかなものへと変化する。青年期における親からの心理的自立が生じていることの証拠であるが，親のほうでも男子には強いコントロールを

	しつけ内容	「きびしかった」と答えた者の割合
外面的行動	礼儀正しくふるまう 帰宅時間を守る 悪い遊びや危険な遊びをしないよう 服装や髪型をきちんとする ことば使いをきちんとする	42.0 51.3 52.6 59.8 58.7 58.9 28.6 37.6 34.9 43.8
社会道徳	公園や駅でゴミを投げ捨てないように 駅のホームの行列や買物の順番にわり込まないように 弱いものいじめをしないように	14.4 19.4 12.5 13.1 16.2 17.0
社会性	嘘をつかないように 自分の行動に責任をもつことについて 約束を破らないように 他人に迷惑をかけないことについて	38.1 38.6 42.9 43.4 33.3 35.0 69.5 71.1
役割取得の期待	まだ小学生・中学生だから～してはいけない 男の子らしく・女の子らしくふるまうように 兄または姉らしくふるまうように 弟または妹らしくふるまうように	18.9 22.1 7.9 16.1 20.7 27.7 6.5 9.4
家族役割や親の権威への服従	※家事の手伝いをすることについて ※親のいいつけをすなおにきくことについて 親・兄弟の恥にならないように	15.7 29.6 44.7 60.2 9.0 9.3
達成の強調	成績や勉強について 進路のことについて	19.2 28.0 10.5 14.5

※男女で10%以上差のある項目

図3　小学校・中学校時代のしつけと男女差　——男子　……女子

	しつけ内容	「きびしかった」と答えた者の割合
外面的行動	※礼儀正しくふるまう ※帰宅時間を守る ※悪い遊びや危険な遊びをしないよう ※服装や髪型をきちんとする ※ことば使いをきちんとする	20.4 39.0 18.0 49.3 35.6 56.3 18.7 29.2 19.7 40.0
社会道徳	公園や駅でゴミを投げ捨てないように 駅のホームの行列や買物の順番にわり込まないように 弱いものいじめをしないように	5.4 10.6 5.7 6.7 8.7 9.4
社会性	嘘をつかないように 自分の行動に責任をもつことについて 約束を破らないように 他人に迷惑をかけないことについて	23.2 26.9 47.7 57.0 22.0 24.8 62.9 67.4
役割取得の期待	※男の子らしく・女の子らしくふるまうように ※兄または姉らしくふるまうように 弟または妹らしくふるまうように	5.2 16.3 9.6 21.3 4.3 6.4
家族役割や親の権威への服従	※家事の手伝いをすることについて ※親のいいつけをすなおにきくことについて 親・兄弟の恥にならないように	8.8 34.3 21.3 40.5 7.0 12.5
達成の強調	成績や勉強について 進路のことについて	17.7 22.4 20.1 25.3

※男女で10%以上差のある項目

図4　高校時代のしつけと男女差　——男子　……女子

せずに自律的に行動することを期待していると考えられる。しつけの小・中学校時代から高校時代への年齢にともなう変化は，全体として，しつけの「きびしさ」が減少する方向で作用している。ほとんどの項目で高校時代では「きびしい」と答えるものの割合が減少しているが，女子に対するしつけではきびしさに大きな減少が見られず，年齢による変化をあまり受けないといえよう。例外的に，男女ともに年齢の推移によって，逆にきびしくなる項目としては，「進路に関する期待」と「責任ある行動をすること」の2つである。これらは青年期の自立性の獲得にかかわる項目である。また，年齢的変化にかかわらず，きびしさの比較的変らない項目は，(3)社会性，及び(4)役割取得の期待である。

以上に述べたように，我が国ではしつけ内容ときびしさの度合いに性別による大きな差異が存在している。とくに青年期の女子に対しては，外的権威や親の権威に従順であることが期待されており，年齢による変化も少なく，男子よりも全般的に厳しいしつけが行われている。またコーンの外的権威への同調は，女子に対してよくあてはまるといえよう。

(3) 社会階層によるきびしさの違い

本稿では社会階層の指標として，父親の職業，父親の学歴，母親の学歴，家庭の経済状態[4]の4変数を扱う。すでに表1に示したように，父親の職業では，専門的・技術的職業11.8%，管理的職業25.8%と専門・管理職の父親をもつ者が4割近くを占めている。以下では，階層間の差異が明確になるよう，父職については，上級ノンマニュアル（専門・管理職）とマニュアル（販売・サービス職・技能工・運輸保安職・農林漁業）の比較を行うことにした。またしつけについては，小・中学校時代の回顧的データを使用する。なぜなら高校時代は，精神的・物理的に親の監督・コントロールから離れ，自立していく時期である。従って親のしつけと階層の関連性を検討するには，適切ではないといえよう。

(1) 外面的行動

表4は，小・中学校時代のしつけのきびしさを男女別・階層別に集計した結果である。外面的行動のしつけは，「礼儀正しく」「ことばづかいをきちんとする」「服装・髪型をきちんとする」「悪い遊びをしない」「帰宅時間を守る」の5項目からなり，コーンの仮説での<外的権威への同調>に対応するものと考えてさしつかえないだろう。父親の上級ノンマニュアルとマニュアルを比較した結果，5項目のうち男子では「礼儀正しく」と「ことばづかい」の2項目で，また女子では「礼儀正しく」の項目で父職と5%以下の水準で統計的有意差を示した。いずれも上級ノンマニュアルのほうが「きびしかった」と答える者が多く，「礼儀」では男子：上級ノンマニュアル49.1%>マニュアル39.0%，女子：上級ノンマニュアル58.6%>マニュアル43.3%，「ことばづかい」（男子）では上級ノンマニュアル41.4%>マニ

表4　外面的行動と社会階層（上段：男子，下段：女子）数値は「きびしかった」と答えた者の割合（%）

	父職業		父学歴			母学歴			経済状態	
	上級ノンマニュアル	マニュアル	義務教育卒	高校卒	大学卒	義務教育卒	高校卒	大学卒	豊か	貧しい
礼儀正しくふるまう	49.1	39.0	41.9	39.2	48.4	35.4	44.7	45.2	50.3	37.4
	58.6	43.3	53.7	55.9	57.3	57.1	53.3	60.0	52.1	51.8
帰宅時間を守る	53.3	55.8	51.4	54.6	54.7	51.2	53.7	51.6	49.1	56.1
	62.5	53.2	67.1	58.8	53.8	64.8	58.3	56.7	59.4	61.3
悪い遊びや危険な遊びをしないように	63.9	59.3	54.1	65.4	60.2	52.4	63.8	54.8	59.6	58.3
	61.8	53.8	67.1	66.2	54.7	71.4	56.3	61.0	60.4	58.1
服装や髪型をきちんとすることについて	36.1	41.3	32.4	42.3	40.6	31.7	40.4	40.3	34.2	40.9
	29.8	30.6	34.1	30.4	30.8	35.2	26.3	38.3	30.9	27.4
ことば使いをきちんとすることについて	41.4	31.4	29.7	31.5	46.1	22.0	37.2	45.2	36.0	34.3
	49.3	41.0	43.9	47.1	47.9	44.0	45.7	48.3	41.7	47.4

（太枠は5%以下の水準で有意）

ュアル31.4%，となる。

次に親の学歴による差異について表4からわかることは，男子に学歴差が顕著であり，「礼儀」「服装・髪型」「ことばづかい」の3項目でそれぞれ学歴差が生じている。いずれも父母が高学歴層の者ほど「きびしかった」と答える率が高い。女子では，「帰宅時間を守る」と「悪い遊びをしない」で学歴差が見られたが，この2項目については他と逆に低い学歴層ほどきびしくなっている。また家庭の経済状態では，「礼儀」を重視するのは豊かな階層に多いということ以外，差異は見出せなかった。

以上の結果からは，高い階層ほど「礼儀」や「ことばづかい」「服装・髪型」などの外面的行動をきちんとすることにきびしいしつけがなされていると判断できるのである。この傾向は男子において，とくに顕著であった。しかし，女子にのみ特有の傾向として，低い学歴層は高い学歴層に比べて，女の子に対して「帰宅時間」「悪い遊び」に厳格なしつけを行っていることがわかる。

以上の結果は，「低い階層ほど親は子どもに外的権威に従順であることを望ましいと考える」というコーンの仮説とは全く反対の命題を指示するものである。親の価値期待を調査したわけではないので比較はできないが，日本ではコーンの自立―同調の1次元軸は，成立しないのではないかと予想できる[5]。

(2)　社会道徳

社会道徳の項目は，「公園や駅でゴミを投げ捨てないように」「駅のホームの行列や買い

表5　社会道徳と社会階層（上段：男子，下段：女子）数値は「きびしかった」と答えた者の割合（%）

	父職業		父学歴			母学歴			経済状態	
	上級ノンマニュアル	マニュアル	義務教育卒	高校卒	大学卒	義務教育卒	高校卒	大学卒	豊か	貧しい
公園や駅でゴミを投げ捨てないように	17.3	11.1	16.2	13.1	14.2	13.4	14.4	11.3	18.1	11.8
	19.7	15.7	12.2	25.2	21.4	18.7	23.4	15.3	19.5	20.4
駅のホームの行列や買い物の順番に割り込まないように	16.8	9.5	12.3	13.2	11.0	13.6	14.5	6.5	12.0	12.3
	11.2	11.7	11.0	16.9	15.4	10.0	15.7	15.3	12.6	14.4
弱いものいじめをしないように	18.5	14.7	16.2	19.4	16.4	13.4	20.9	16.1	15.6	17.6
	14.1	18.9	19.8	18.8	14.7	13.3	20.3	15.8	12.0	20.0

（太枠は5%以下の水準で有意）

物の順番に割り込まないように」「弱いものいじめをしないように」の3項目である（表5参照）。女子の場合は，しつけのきびしさにほとんど差異はなかった。男子では，3項目のすべてにおいて上級ノンマニュアルのほうが少しきびしくしつけられる傾向があり，とくに「順番に割り込まない」に有意差がみられた（男子：上級ノンマニュアル16.8%>マニュアル9.5%）。しかし階層差は大きくはない。

社会道徳の側面に関しては，全体として階層による明確な差異は見出せないということができるだろう。また「きびしかった」と答える者の割合も，10%～20%の範囲で他の側面よりは少なくなっている。我が国は社会道徳のしつけについては，社会階層的差異の小さい社会であるということがいえよう。

(3)　社　会　性

社会性の項目は，「嘘をつかない」「行動に責任を持つ」「約束をやぶらない」「他人に迷惑をかけない」の4項目である。表6から，項目により階層差の現われかたが異なっていることがわかる。「嘘をつかないように」の項目は低い学歴層の親がきびしくしつけている。一方，「他人に迷惑をかけない」という対人関係にかかわる価値は，父職の高い階層および高い学歴層のほうがきびしくしつけている。また，家庭の経済状態による差異が「嘘をつかない」と「約束を破らない」のよく似た2項目に見られることが興味深い。経済的に恵まれない家庭ほど，これらの価値を子どもに強調していることがわかる。「行動に責任をもつ」という責任性は，これまでの親の期待調査から，高い階層の価値観であると報告されているが（総理府，1981），今回の調査では明確な階層差は見出せなかった。今後，社会性を一元的にとらえるのではなく，複数の次元から考える必要があるのではないだろうか。

(4)　役割取得の期待

ここでの項目は，「男の子らしく・女の子らしくふるまうように」「兄・姉らしく」「弟・

表6　社会性と社会階層（上段：男子，下段：女子）数値は「きびしかった」と答えた者の割合（%）

	父職業		父学歴			母学歴			経済状態	
	上級ノンマニュアル	マニュアル	義務教育卒	高校卒	大学卒	義務教育卒	高校卒	大学卒	豊か	貧しい
嘘をつかないように	39.6	33.3	47.3	36.2	34.4	40.2	38.8	33.9	39.4	38.4
	35.8	37.8	36.6	46.3	39.7	37.4	44.9	31.0	32.6	43.0
自分の行動に責任をもつことについて	45.6	41.5	44.6	43.1	45.3	41.5	47.9	37.1	44.1	42.4
	48.3	35.5	50.0	40.7	41.9	51.6	42.4	43.3	44.0	44.5
約束を破らないように	37.3	31.2	37.0	38.5	30.5	38.3	34.6	38.7	34.4	35.5
	32.5	29.2	35.4	34.6	38.8	30.0	37.9	30.5	27.9	38.4
他人に迷惑をかけないことについて	76.9	64.5	56.8	71.5	74.2	67.1	71.3	67.7	71.4	69.1
	69.1	73.3	77.8	74.3	68.4	74.7	73.2	70.0	72.3	72.8

（太枠は5%以下の水準で有意）

表7　役割取得の期待と社会階層（上段：男子，下段：女子）

	父職業		父学歴			母学歴			経済状態	
	上級ノンマニュアル	マニュアル	義務教育卒	高校卒	大学卒	義務教育卒	高校卒	大学卒	豊か	貧しい
まだ小学生・中学生なのだから～してはいけない	26.2	14.1	23.0	16.5	21.3	18.3	19.4	18.3	17.6	20.6
	25.3	22.0	18.3	23.0	27.4	24.2	21.2	30.0	24.0	21.9
男の子らしく・女の子らしくふるまうように	9.0	7.0	8.2	6.2	7.1	4.9	9.7	4.8	5.7	9.1
	16.4	17.3	17.1	19.1	15.5	12.1	17.7	29.7	17.3	15.7
兄または姉らしくふるまうように	23.8	19.8	23.8	22.6	16.9	15.2	24.3	11.8	17.6	22.7
	33.7	23.7	34.0	26.5	29.0	26.4	29.4	29.7	23.8	20.4
弟または妹らしくふるまうように	9.5	4.8	13.9	7.1	4.2	11.9	4.2	3.1	7.5	6.3
	11.9	10.3	8.1	15.5	10.5	2.6	13.3	18.2	10.1	9.4

（太枠は5%以下の水準で有意）

妹らしく」「まだ小学生・中学生なのだから～してはいけない」の4項目である。これらは，特定の地位役割と結びついた行動規範の取得を期待するしつけであるといえよう。

表7より，父職については，男子の「まだ小学生・中学生だから」と女子の「兄・姉らしく」を除いて，男女ともほとんどの項目で差は見出せなかった。しかし父母の学歴で比較すると，例えば，「まだ小学生・中学生だから」（女子）の項では，父母ともに高学歴層ほど数値が高くなっている。また「男の子・女の子らしく」（女子：母大卒29.7%>中卒12.1%）「妹らしく」（女子：母大卒18.2%>中卒2.6%）でも，女子は母学歴の高いほど厳しく

しつけられている。このように，役割取得のしつけは，とくに女子に関して差がみられ，高学歴層ほど女子に対して「らしく」あることをしつけているといえるだろう。男子についてはほとんど学歴差は生じていないが，強いていうならば，「弟らしく」あることをきびしく強調するのは，低い学歴層であるといえる。

以上の結果は，これまでアメリカで行われてきたしつけの階層差研究の示す結果とは異なっている。Gecas (1979) のレビューによれば，特定の地位役割にそった規範を強調するしつけ (positional apeals) は，低い階層に多くみられ，高い階層では地位ではなく個人の人格に訴えるしつけが行われているという一般化を支持している。今回の調査結果は，しつけ内容に関するものであり，比較して述べることは必ずしも適切ではないが，地位を強調するしつけが低い階層に特徴的であるという命題とはまったく逆の傾向が見出されている。すなわち，我が国では，階層との関連性はあまり強くはないが，高い階層ほど「らしく」あることを子どもに期待しているように思われる。この結果は，高い階層ほど礼儀などの外面的行動に厳しいという上記の結果とも符合するものである。

(5) 家族役割や親の権威への服従

ここに含まれる項目は，「家事の手伝いをすること」「親のいいつけをすなおにきくこと」「親・兄弟の恥にならないように」の3項目である（表8）。これらはいずれも家族内の役割や親の権威，コントロールに対して従順であることに関連した項目といえよう。

「家事の手伝い」については，男子はすべての階層変数において差は見出せなかった。しかし女子では階層による差異が明らかである。表8に示すように，女子では父職上級ノンマニュアル22.5%＜マニュアル32.5%（p＜.04），父学歴大卒23.3%＜中卒34.1%，母学歴大卒28.3%≒中卒30.8%，経済状態豊か21.6%＜貧しい35.7%となり，階層が低い層で「家事の手伝い」が強調されていることがわかる。

表8 家族役割や親の権威への服従（上段：男子，下段：女子）

	父職業		父学歴			母学歴			経済状態	
	上級ノンマニュアル	マニュアル	義務教育卒	高校卒	大学卒	義務教育卒	高校卒	大学卒	豊か	貧しい
家事の手伝いをすることについて	16.0	18.6	14.9	15.4	15.6	15.9	14.4	17.7	13.7	17.4
	22.5	32.5	34.1	31.6	23.3	30.8	30.3	28.3	21.6	35.7
親のいいつけをすなおにきくことについて	46.4	46.2	45.9	47.7	43.3	46.3	46.3	42.6	43.1	45.9
	59.6	60.5	61.0	67.6	56.9	64.8	61.3	61.7	58.4	62.2
親・兄弟の恥にならないように	10.6	6.1	7.5	10.3	10.6	9.0	8.3	10.3	7.9	9.9
	9.7	9.1	19.0	5.2	7.4	16.1	7.9	3.6	11.7	7.9

（太枠は5%以下の水準で有意）

「親のいいつけをすなおにきく」という親の権威への服従の側面では，男子女子ともに，ほとんどの階層変数で差異は見出せなかった。「親・兄弟の恥にならないように」では，女子に差が顕著であり，父中卒19.0%>父大卒7.4%，母中卒16.1%>母大卒3.6%と低学歴の親ほど数値が高い。「恥」の概念は，我が国の伝統的な価値観であるといわれるが，低学歴層ほど女子に対して伝統的なしつけが重視されているということができるだろう。

以上の結果より，<家族役割や親の権威への服従>のしつけは，男子では階層差がないが，女子では階層差が生じており，父職や親の学歴の低い層ほどきびしくしつけられる傾向のあることがわかる。しかし「親のいいつけをすなおにきく」項目で差異がなかったことは，以上の結論を述べるにあたって疑問を投げかけるものである。明確な一般化はできないが，傾向として指摘するにとどめておこう。

(6)　達成の強調

一般に中流階級は，子どもに高い教育達成，学業達成を期待することがこれまでの研究から明らかにされている。今回の調査でも同様の結果が得られている。表9に示すように，高い階層ほど達成についてきびしくしつけられていることが明らかとなっている。

表9から，小・中学校時代と高校時代の結果を比較すると，高校時代にうつると階層差が広がる傾向がある。例えば，「成績・勉強」の男子についてみると，小・中学校時代上級ノンマニュアル33.7%>マニュアル23.3%で差は10.4%であったが，高校時代になると差は15.6%になる。また女子の進路については，小・中学校時代では母学歴大卒15.0%>中卒8.8%で差は6.2%であったが，高校時代では母学歴大卒31.7%>中卒12.1%で差は19.6%に拡大する。全ての変数についてあてはまるわけではないが，相対的にみて階層較差の拡大す

表9　達成の強調と社会階層（上段：男子，下段：女子）数値は「きびしかった」と答えた者の割合（%）

		父職業		父学歴			母学歴			経済状態	
		上級ノンマニュアル	マニュアル	義務教育卒	高校卒	大学卒	義務教育卒	高校卒	大学卒	豊か	貧しい
小中学校時代	成績や勉強について	33.7	23.3	21.6	30.8	32.0	19.5	31.4	33.9	32.3	24.3
		22.4	15.7	19.8	22.1	22.2	16.5	18.2	31.7	22.0	17.4
	進路のことについて	17.9	11.6	13.5	12.3	18.1	13.4	14.4	17.7	15.6	13.5
		9.2	12.1	7.3	11.8	14.5	8.8	10.6	15.0	12.5	9.1
高校時代(現在)	成績や勉強について	31.4	15.8	18.9	26.4	25.0	23.2	20.7	32.8	26.1	20.5
		22.4	15.1	11.1	16.2	29.1	13.2	18.2	30.0	20.4	16.5
	進路のことについて	29.0	22.7	16.1	28.5	28.9	24.4	27.7	25.8	24.8	26.5
		25.7	20.2	13.4	20.6	29.1	12.1	22.1	31.7	24.5	17.4

（太枠は5%以下の水準で有意）

る傾向があるように思われる。高校時代は発達段階からみて進路選択の時期であり，高い学歴階層ほど子どもに高い達成を期待する傾向が強まる。

5　結果の要約と考察

以上の調査結果から次のような点が指摘できるだろう。

(1)しつけ方法について，社会階層変数との関連性はまったく見出せなかった。

(2)しつけ内容の6つの側面から，性別・発達段階別に「しつけのきびしさ」について比較検討した結果，全体として男女，年齢により大きな差がみられた。青年期において女子は男子よりもきびしくしつけられる傾向があり，それは礼儀などの「外面的行動」や「らしく」あることについての「役割取得の期待」，「家族役割」についてである。男子に比べて女子は，「外的権威への同調」をきびしくしつけられるのである。発達段階で比較すると，男子は高校生になると，しつけはゆるやかなものへと変化するが，女子ではきびしさはあまり変化しない。

(3)社会階層としつけの関連性についても，6つの内容的側面それぞれで比較検討を行った。

第1に，父親の職業階層の高いもの，親の学歴の高いものほど，男女ともに「外面的行動」をきびしくしつけられている。とくに男子に，階層差は顕著である。また女子については，「帰宅時間」「悪い遊びをしないよう」という防衛的側面でのみ，逆の関連すなわち低い階層ほどきびしくしつけられている。しかし「礼儀」「ことばづかい」などは男子と同様に高い階層のほうがきびしい。

第2に，「社会道徳」に関しては，ほとんど階層変数との関連は見出せなかった。

第3に，「社会性」の側面では，対人関係的なしつけは高い階層ほど重視しているが，嘘や約束という公正さについては，低い階層のほうがよりきびしいしつけを行っている。

第4に，「らしく」ある役割取得の期待については，高い階層ほど子どもに「らしく」あることを重視している。

第5に，「家族役割や親の権威への服従」については，低い階層ほど女子に対して家族役割を遂行することにきびしい。そして同時に，家にとって恥とならないようにふるまうことを期待している。しかし男子では差はあまり見出せなかった。親の権威への服従では，男女ともに明確な階層差はなかった。

第6に，高い階層ほど男子女子ともに，達成を強調する傾向が顕著にみられた。

全体として社会階層差の生じた項目を概観すると，高い階層ほど子どもに「外面的行動」や「らしく」あることを強調しており，社会秩序への同調を強く求めていると考えられる。

また高い階層は低い階層に比べて，対人関係や達成の側面でもきびしくしつけている。これに対して低い階層の示すパターンは，この逆であるとともに，低い階層が重視する項目として，家族役割や公正さをあげることができる。しかし性別によって，階層変数の作用する度合いは異なっていることが多い。

以上の結果より，しつけの一定の側面で，階層変数との差が生じていることを指摘できるだろう。少年期のしつけについて，社会階層による差異が存在していることはパーソナリティの形成に社会階層のなんらかの影響力のあることを示唆するものである。このことに関して全体的な特徴を述べれば，高い階層ほどしつけの多くの側面できびしいしつけを行っており，子どもに対する期待の高いことがうかがわれる。これは子どもの発達にとって，高い階層の子どもほど親の大きな期待に圧迫されやすい環境にあることを示唆するものである。今回の調査結果の中でも，「親の期待が大きく負担に感じることが多い」に「よくある」と答えたものは，母学歴大卒20.7%>中卒8.5%であり，学歴の高い親ほど，その子どもは期待の重圧を強く感じていることが示された。

これらの結果から推測できることは，低い階層では，家族という私的「場」における役割遂行や身のまわりの行為についての防衛的な社会化を強調する傾向があり，子どもへの期待の度合いは相対的に弱いということである。それに対し，高い階層は，社会的秩序を重視し，外面的権威に同調するとともにその中で積極的，社会的に適応するような行動様式を子どもに強く期待しているように思われる。いいかえれば，低い階層は，私的自我の形成を強調し，高い階層は社会的自我を形成する方向でしつけを行っていると考えられる。階層によって，生活状況や価値観がどのように異なるかについて充分検討しないことには，明確な判断は下せないが，子どものしつけにみられる階層差には，その背景としてなんらかの生活文化状況の階層差が存在しているように思われる。

注

1) イギリスでも J. & E. Newson による幼児の育て方の継続的調査研究（1963, 1968）が行われ，中流階級と労働者階級ではしつけ方の習慣が異なること，そしてパーソナリティ特性も異なると報告されている。

2) このような価値志向の階層差を生み出すものとして，コーンは親の生活状況の違い，とくに父親の職業（Occupational Conditions）の違いに注目し，3つの次元（管理の厳格性，何を扱う仕事であるかという労働の質，労働の複雑性）から検討している。中流階級の従事する職業の特徴は，(1)シンボルや観念をあつかい，インターパーソナルな関係の仕事であること，(2)自律的で，意志決定にかかわることの多い仕事，(3)成功は，自己のイニシアチブやスキルの結果もたらされることをあげることができる。他方，労働者階級の従事する仕事の特徴は，(1)人間ではなく物を操作する仕事，(2)職場では管理され，指図を受け，ルーティーン・ワークであること，(3)成功は，自己の努力の結果もたらされるのではなく，集団の努力や労働組合に結びついている。

3) Wolfgang (1958) は，暴力のサブカルチャーの例として，黒人や収入の低い白人の親子関係，仲間集団の間で行われる身体的攻撃を強調した。

4) 家庭の経済状態を示す変数として，客観的データをとることは困難であるため，私立大学への進学

を仮定し，どの程度家計に余裕があるかで代理指標とすることにした。質問紙では4段階で細かく分類したが，今回は2つのカテゴリー（豊か／貧しい）に再分類して使用している。「豊か」とは，私立大進学でも「家計にほとんど影響なし」と「学費を一部自分で負担する必要がある」と答えた層である。「貧しい」とは，「学費を大部分自分で負担する必要がある」と「高校を出るのがやっとで余裕はない」と答えた層である。

5) コーン（Kohn, M.）は，自立（中流）―同調（労働者）という親の価値の差異は，産業社会における社会的成層と労働の組織化によって規定されるものであり，文化や社会システムにかかわりなく産業社会で生じると論じている。しかし今回の子どもの側からの結果では，同調的価値は低い階層の価値観ではなく，むしろ逆に高い階層のものであるということになり，コーンの仮説は当てはまらないことになる。

参 考 文 献

Alwine, D. F. 1984 "Trends in Parental Socialization Values: Detroit, 1958-1983" American Journal of Sociology Vol. 90 No. 2.

Berger, J., Cohen, B., Conner, T., and Zeldich, M., Jr. 1966 Status Characteristics and Expectation states. In J. Berger, M. Zelditch Jr., and B. Anderson(Eds.), Sociological Theories in Progress. Boston: Houghton-Miffilin.

Bernstein, B. 1971 Class, Code and Control, Vol. 1. Routledge & Kegan Paul

Bossard, J. H. S. & Boll, E. S. 1945 The Sociology Of Child Development. Harper & Row. 末吉次（監訳）『発達社会学』黎明書房 1971

Bronfenbrenner, U. 1958 "Socialization and Social Class Through Time and Space" In E. E. Maccoby, T. M. Newcomb, and E. L. Hartley(eds), Readings in Social Psychology. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Davis, A. & Havighurst, R. J. 1946 "Social Class and color differences in childrearing." American Sociological Review 11: 698-710

Erlanger, H. S. 1974 "Social Class and Corporal Punishment in Childrearing: A Reassessment." American Sociological Review, Vol. 39: 68-85

Gecas, V. 1979 "The influence of social class on socialization"

Gecas. V. and Nye, F. I. 1974 "Sex and Class Differences in Parent-Child Interaction: A Test of Kohn's Hypothesis". Journal of Marriage and the Family 36.

Hess, R. D. 1970 "Social Class and Ethnic Influences upon Socialization" In Carmichahel's Manual of Child Psychology, Third Edition Paul H. Mussen 1970

Hyman, H. H. 1966 "The Value Systems of Different Classes." In R. Bendix, and S. M. Lipset(ed.), Class, Status and Power.

Kohn, M. L. 1969 Class and Conformity: A Study in Values. Homewood, III.: Dorsey Press.

Kohn, M. L. & Schooler, C. 1983 Work and Personality: An Inquiry into the impact of Social Stratification.

McKinley, D. G. 1964 Social Class and Family Life. Glencoe, III: Free Press.

Miller, S. M. and Riessman, F. "Working-Class Authoritarianism: A Critique of Lipset."

Naoi, A. and Schooler, C. "Occupational Conditions and Psychological Functioning in Japan"

Olsen, N. J. "Family Structure and Socialization Patterns in Taiwan"

Parsons, T. & Bales, E. F. 1955 Family, Socialization and Interraction Process. Routledge & Kegan Paul. 橋爪貞雄他（訳）『核家族と子どもの社会化 上・下』黎明書房 1970

Sears, R. R., Maccoby, E. E., and Levin, H. 1957 Patterns of Child Rearing. Evaston, III: Row, Peterson.

東 洋，柏木恵子，R. D. ヘス『母親の態度・行動と子どもの知的発達―日米比較研究』東京大学出版会，1981

今田高俊・原純輔「社会的地位の一貫性と非一貫性」，富永健一編『日本の階層構造』pp. 161-198，東京大学出版会，1979

大阪大学人間科学部教育社会学研究室『青少年と自立性』大阪大学教育社会学・教育計画論研究収録，1985

祐宗省三　子どもの社会心理1『家庭』，金子書店，1972
総理府青少年対策本部編『国際比較日本の子供と母親』1981
柏木恵子『発達心理学入門　こどもの発達・学習・社会化』1978
東京学芸大学社会学研究室「子どもの“しつけ”と道徳教育」日本教育社会学会編　教育社会学研究18集，1963
バーンスティン『教育伝達の社会学』萩原元昭編訳，明治図書，1985
姫岡勤，上子武次，増田光吉『現代のしつけと親子関係』，川島書店，1974
松原治郎，佐藤カツコ　現代のエスプリNo. 113『しつけ』，至文堂，1976
我妻洋，原ひろ子『しつけ』，引文堂，1974

＜付記＞
本調査は米川英樹氏ならびに灘本昌久氏との共同研究によるものであり，記して感謝の意を表します。

SOCIAL CLASS DIFFERENCES IN CHILD REARING IN JAPAN

Emi KATAOKA

This paper examines social class influences on child rearing in Japan. Specifically there are two questions that this paper deals with: (1) What are the affects of social class on parental discipline? (2) On which aspects of discipline does social class appear?

This paper includes a review of available literature on socialization and social class in USA and in Japan. Many previous studies sugggest that there are clear class differences related to parental behavior and parental values on child rearing in USA. However in Japan, though sex differences are significant, the degreee of class differences seems to be weak.

Using data from sample surveys of the Osaka area in 1982, this paper examines the relationship between social class factors and parental discipline. Findings are follows:

(1) As for method of discipline, there were no class nor sex differences.

(2) We found noted differences on strictness with regard to sex and age. Especially on the value of conformity to external standards, girls were disciplined more strictly than boys.

(3) Our findings suggest that there are significant differences between social class factors and disciplinary strictness in the aspects of conformity, stereo-typed behaviors and achievement. People of upper-class tend to discipline their children more strictly than those of lower-class and parental expectations of upper-class are greater.

People of upper-class status are more likely to stress values of conformity to external standards of behavior than lower-class status people. They tend to strongly require their children to conform to the social order. This result shows that Kohn's Hypothesis is not applicable to Japan. Compared to those of lower-class status, upper-class tend to discipline behavior connected with interpersonal relationships and stereo-typed behaviors more strictly. People of lower-class reveal a pattern opposite of that of upper-class, and they expect children to be honest and to internalize family roles. But the degree of class influences on discipline between boys and girls were different.

From these findings, people of lower-class are more likely to stress behaviors which defend their own positions such as honesty and role performance in the

private area of family. And they have fewer expectations of their children than do upper-class status people. On the other hand, people of upper-class status put more weight on social order and conformity to external authority. They seem to expect their children to develop patterns of behavior that which will be befitting to high future social positions.